

アルプスを源流に持つライン川は街のシンボル。バーゼルの中心部で大きく向きを変え、国境を接するフランス、ドイツの方へと流れていきます。

アートの伝統と革新を見守ってきたバーゼル

国際決済銀行が本部を置くバーゼル。「バーゼル」と聞いて銀行規制を思い浮かべるのは金融関係者ぐらいでしょうか。この街は古くから芸術の中心地として発展してきた歴史を持っています。1km当たり1つ以上美術館が所在するといわれるバーゼルス市は、美術館の密度がスイスで最も高く、アートは市民にとって身近な存在となってきました。その象徴として、バーゼルには欧州最古とされる公立美術館があります。芸術がまだ一握りの富裕層のものであった17世紀当時、市とバーゼル大学が収集家から作品を買い取り、一般市民向けにアートコレクションを公開したのがその始まりといわれています。

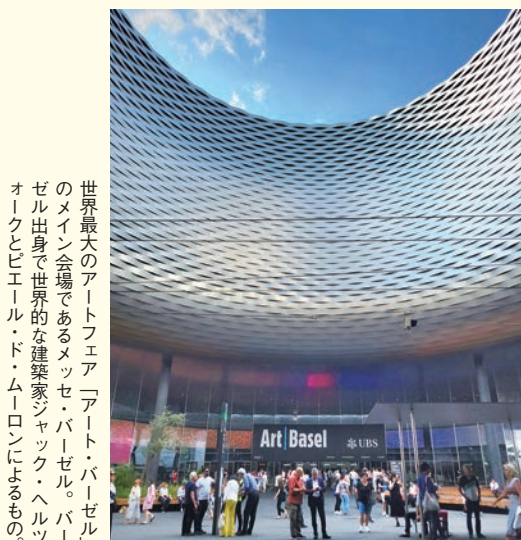
アートの街としてのバーゼルの魅力を語る上で欠かせないのが、1970年以降、バーゼルで毎年開催される世界最大のアートフェア「アート・バーゼル」。開催期間中は、世界中からアーティスト、美術商、収集家などのアート関係者が一堂に会し、バーゼルの街は普段見ない華やぎをまといまいます。フェアの開催に合わせ、市内各美術館が各々こだわりの特別展

を企画することも多く、厳選されたアートコレクションの競演を楽しむことができます。

そんなアートの世界でも、技術革新が新しい風を吹き込んでいます。金融界では近年暗号資産が注目されていますが、アート界では同様のブロックチェーン技術を用いたNFT（Non-Fungible Token）が大きな話題を呼んでいます。NFTは、作品を識別する情報をブロックチェーンに記録する電子証明書役割を持ち、容易に複製可能であるデジタルデータに一点物としての資産価値を与えられるようになった点で革新的とされています。また、NFT作品が二次流通する度に、制作者に手数料が入る仕組みとなっていることが多く、将来の作品価値上昇の恩恵を受けられるようになるため、アーティストにとって画期的といえます。古都を緩やかに流れるライン川を眺めながら、技術革新がアートにもたらす可能性に思いを馳せられるのもバーゼルならではかもしれません。

（国際決済銀行、バーゼル）

*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。



世界最大のアートフェア「アート・バーゼル」のメイン会場であるメッセ・バーゼル。バーゼル出身で世界的な建築家ジャック・ヘルツォークとヒェール・ド・ムーロンによるもの。

街の至るところで見られるアート作品。こちらの噴水は、廃材を利用した動く彫刻で知られるスイスの芸術家ジャン・ティンゲリーによるもの。

